文献センター通信

第３号
2007年7月18日
一部100円

主な内容

東京の熱い夏・シネマフェスタ……１
ＡブックフェアＧ８行動……２
文献センター自己紹介……４
富士宮だより……５
運営委員会議事録……６
私はアナーキスト……７
会員募集／寄贈書……８

スペイン革命ドキュメンタリー映画『希望と欺瞞の間に』のＤＶＤ化と日本語字幕化完成を記念して、フィルム・フェスティバル「キネマ・フェスタ〈アナーキー〉」を開催いたします。

また、七月二二日（日曜日）には音楽としての「革新主義運動」を代表するシンガーソングライターＤ・ロビックスほかを招いてコンサートが行われます。

この二二日を除く開催日には『スペインの短い夏』『希望と欺瞞の間に』を交代で上映し、上映終了後にゲスト・トークならびに参考上映を行います。

開催日：七月二一日（土）、二二日（日）、二八日（土）、二九日（日）、八月四日（土）、五日（日）

会　場：poetry in the kitchen（ポエトリー・イン・ザ・キッチン）　東京都文京区水道一―二―六　タトルビル二階

主　催：キネマ・フェスタ実行委員会（アナキズム文献センター・irregullar・『アナキズム』誌編集委員会）

入場料：一〇〇〇円（資料込）

〈東京熱い夏〉

キネマ・フェスタ『アナーキー』

――それぞれの映画の視点から現代の深層を撃つ――

（『希望と欺瞞の間に』日本語字幕化記念）

ＪＲ・地下鉄「飯田橋駅」より大曲交差点方面徒歩一〇分

基本タイムテーブル：

午後二時～スペイン革命ドキュメンタリー映画『スペインの短い夏』または『希望と欺瞞の間に』

午後四時～ゲストトーク

午後四時三〇分～ＤＶＤ参考上映

【スケジュール】

7/21 prologue　13:00-18:30
『希望と欺瞞の間に』、オリジナル『ティエンポ・デ・バルセロナ』。参考上映『Durruti』『出草之歌』、トーク・井上修

7/22 live! 14:00-19:00
ライブ「若林圭子」「田中哲朗」「ロビックス」
参考『ジョリモーム』ほかインタビューなど

7/28 日本映画とアナキズム 13:00-18:30
『希望と欺瞞の間に』, トーク＋映像　松田昌男×平沢剛
参考『ルイズ、その絆は』『大杉栄と伊藤野枝』

7/29《性／別》13:00-19:00
『希望と欺瞞の間に』、『オカマに生れて：拝啓お医者様』『若いトランスたち』『トランス家族』他とトーキング。 参考『Voices from the front』

8/2 ゲバラ 12:30-18:30
『スペインの短い夏』。参考『モーターサイクル・ダイアリーズ』『チェ　人々の為に』、トーク・太田昌国

8/3 闘争の現場から（エピローグ）12:30-18:30
『希望と欺瞞の間に』『関西公園～ Public Blue ～』『NO-VOX とは』with Talk、
『ドイツ・反 G8 アクション参加報告映像』with Talk

※詳しくは HP →　www.cira-japana.net

「第12回サンフランシスコ・アナキスト・ブックフェアー」とドイツ反Ｇ８行動

成田圭祐（イレギュラー・リズム・アサイラム）

今年の３月、「アナキズム文献センター」のカレンダーとビラを携えアメリカ西海岸に行って来た。サンフランシスコ、ポートランド、オリンピア、タコマ、シアトルといった西海岸の主要都市にあるほとんどのアナキスト書店・インフォショップに、アナキスト関連の書籍をセンターまで送って欲しいとのメッセージを載せた「アナキズム文献センター」のビラを置くことが出来た。

シアトルのアナキスト書店「レフト・バンク・ブックス」はその場でカレンダーを５冊購入してくれ、今回の旅の一番の目的であった、数千人規模の参加者のある毎年恒例のイベント「サンフランシスコ・アナキスト・ブックフェアー」でも、たくさんのカレンダーを販売し、ビラも大量に配り、現地のアナキストたちと交流した。

ギー・ドゥボールの著作などシチュアシオニスト系の本の仏語から英語への翻訳で知られ、来日の経験もあるケン・ナッブは非常に親切にしてくれ、当日彼が販売していた本のすべてを「アナキズム文献センター」に寄付してくれた。また、新進気鋭のアナキスト著述家ダニエル・バートン＝ローズも、彼が編集した本を「アナキズム文献センター」に寄付してくれた。

アナキスト・ブックフェアーには、２～３人程度の小さなコレクティブからＩＷＷのような大組織まで、50～60のテーブルが並んでいた。小さなグループ／コレクティブの多種多様さは西海岸のアナキズム運動の豊かさと層の厚さを感じるものであったし、１００年の歴史を持つＩＷＷは、コーヒーショップ・チェーン「スターバックス」での組合活動など、若い力と感性を積極的に取り入れながら、現在的な問題の取り組みに成功していることなどもあって、実に生き生きとしていた。

小さなアナキスト・グループは、それぞれ音楽やアートなどを用いながら独自の活動を展開し、ＩＷＷなどの大きなアナキズム系組織は、直接的ではないにしても、そのような小さなグループからの支持と影響を受けながらより活発になっている、という印象を持った。

ブックフェアーの会場風景（上）と、イレギュラーのテーブル

そして、アメリカから帰って間もない６月、ドイツのハイリゲンダムで行なわれたＧ８サミットに対する反対行動に参加する機会を得た。

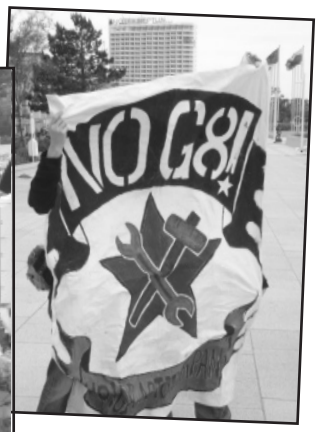
６月２日の巨大なデモ行進から

始まり、サミット会場周辺での道路封鎖、現地で落ち合った日本人活動家たちとの日本政府関係者が宿泊するホテル内での抗議行動、音楽での抵抗表現（ライブ）、突発的に発生するデモや座り込み、などなど、およそ一週間の間、毎日何かしらの行動に関わった。

それぞれの抵抗表現の多様さを認める、ということが、シアトルでの反ＷＴＯ行動以来、反グローバリゼーション運動のなかでの基調だが、今回もまさに多種多様、自発的に行動する人々の創造的な抵抗がサミット会場周辺のあちこちで展開された。警察や銀行・大企業のビルに投石する者もいれば、音楽を演奏して抗議者を勇気づける者もいたし、ピエロの格好で戯けながら警察のフォーメーションを崩す者もいた。それぞれが思い思いの方法で、Ｇ８反対の意思表示をし、Ｇ８に押し付けられる世界とは違う世界があり得る（またはすでにある）ことを表現していた。サミットを阻止することは出来なかったが、掲げられていたスローガン「もう一つの世界は可能だ！」という言葉に、手ごたえを感じられたことは非常に大きな経験だった。

反Ｇ８行動の前後には、コペンハーゲン、ベルリンやハンブルグなどの都市に滞在し、それぞれの地域のアクティヴィストたちと交流し、スクワットやインフォショップなどにも案内してもらった。そのような場所では、皆で食事したり、街頭行動の準備をしたり、自転車を修理したり、上映会したり、パーティーしたりと、毎日何かしらで人が集っており、大企業や国家の思惑に振り回されるのではない、自分たち自身の価値観に基づいた生活を、言葉よりも先に実際的に、地道だけれども楽しそうに、模索し創造する光景があった。このような日常的なオルタナティブの実践がバックグラウンドとなって、今回の反Ｇ８のような多彩で大規模な抵抗が生み出されていることがよく分かった。

来年２００８年は北海道の洞爺湖で７月、Ｇ８サミットが予定されているが、それに対する抵抗が形式的なもので終わってしまうか、「もう一つの世界は可能だ！」ということを実感出来るものになるかは、今から一年の間に様々な立場の人が、それぞれの抵抗手段の多様性を認めながら、Ｇ８が強要する世界とは違う自由な世界の可能性を、どれだけ実際的かつ日常的に具体化・視覚化していけるかどうかだろう。



文献センター自己紹介　2

はじめに

三十年以上も昔に投函した自分の手紙に再会することは稀な出来事であろう。それが恋文などであったら、一篇の小説にでもなりそうなことであるが、この場合は残念ながらそのような色艶とは無縁で、二五歳の若者が六五歳の御老体にあてた事務的な内容である。この再会を用意してくれたのは杉藤二郎で、その手紙は同氏がかつて文献センターに寄贈してくれたダンボール入りのビラやチラシ、冊子などの間にまぎれ込んでいた。

先日、ふとその手紙のことを思い出し、あちこち引っくり返して探しあてて目を通すと、奇しくもセンター設立を呼びかけた最初の呼びかけ文に同封した手紙であった。折しもセンターの歩みをまとめようと思っていたから、記憶を確かめ、またそれによって思い出すこともあろうかと手もとにとどめた。手紙には一九七〇年十月二四日に受け取った旨のメモ書きが記されている。当時の資料をみると、センターの最初の文書は同十月二六日付の「日本アナキズム研究センターの設立について」で、龍武一郎、尾関弘、奥沢の連名となっている。従って杉藤さんには、全く同文であるが、その前段階のコピーを送付したことになる。比較的身近かに感じていた杉藤さんにいち早く手紙とともに送ったようである。

呼びかけの挨拶文を引用しておこう。

日本におけるアナキズム運動が盛んになるにつれ、反権力、絶対自由、無政府の思想の研究と新しい理論の構築が緊急の必要となってきました。アナキズム研究を志すものに対して、広汎な文献、資料を集中し、それを広く役立てる必要から日本アナキズム研究センターを設立しました。

文献、資料の収集及びセンターの利用に関して、みなさんの積極的な参加・協力を期待します。

（外国名はＣＩＲＡ―Ｎｉｐｐｏｎとします。ＣＩＲＡとは、スイスのローザンヌにある国際アナキズム研究センターで、世界中のアナキズム文献を集めています。われわれの研究センターは、ＣＩＲＡと提携することによって、これらの文献・資料を利用することを考えています。）

「設立しました」「参加・協力を期待します」といった表現に、気負いばかりではないいささかの考え方が表われているように思い返されるが、この点は後に触れることもあろう。時代は六八～六九年の全共闘運動、東大闘争があり、その年七〇年は三里塚の闘争が開始され、また光化学スモッグの発生など公害が多発していた。ヘドロ流入によってマヒ状態となった田子ノ浦はそれ以降の長きにわたって、富士宮に通うたびに嗅ぐことになった強烈なヘドロ臭を発散させていた。先の手紙は、十月二五日、「センターの件で龍さんの所に行く予定です。もし出来たら帰りに杉藤さんの所へお寄りしようかとも考えておりますが……」と記しているが、その時は実現しないで翌十一月に杉藤宅に寄った。何故そのように断定できるかというと、その十一月二五日に三島由紀夫が楯の会メンバー四名と市ヶ谷の自衛隊本部に乗り込み自死した、そのテレビニュースを私は杉藤宅で見たからである。「奥沢君、大変なことが起こっているよ……」と、部屋に入るなりテレビに見入ったことを覚えている。

いずれにしても、十月には文献センターの活動が開始された。次回からは一九七三年の「設立と活動の経過」によって、その様子を見ていくことにする。

（※次号に続く）

第三回富士宮集会

今年は富士宮集会を九月に行います。ぜひ顔を出してください。九月一五日（土）～一七日（月・祝日）を予定。

富士宮だより

五月の連休を利用したセンターでの作業は最終日、皆で、多くの人で賑わう浅間神社のお祭り見物で終了した。その浅間神社で六月二日（土）～三日（日）「Ｂ級グルメの祭典！　Ｂ―１グランプリ　ｉｎ　ＦＵＪＩＮＯＭＩＹＡ」が全国から二一団体の参加を得て開催され、両日で主催者も驚く二五万人の人々が富士宮の街を埋めつくした。

その中、龍さん夫妻はフリーマーケットで参加するも、暑さのため初日でダウン。私は三日にそんなに人が集まるとも知らず、九時すぎにアパートを出発。会場に着くとすでに五〇〇人以上が並んでいた。行列に並ぶのが嫌いな私だが、とりあえず来てしまったからには、何でもいいから食べたいという思いが強くなり、会場に入るまで一時間、最初の食べ物にありついたのがその三〇分後、何とか三品目を手に入れ早々と家に帰るとすでに昼を回っていた。

六月に入ると不如帰の鳴き声も聞かれ、爽やかな初夏の陽気に誘われて田貫湖へ。のんびりと湿原を散歩していると、なぜか目に入るのが蕨。しっかりと頂いて帰る途中、林道を走っていると淡竹（はちく）が採ってくれと私を誘う。周囲を見渡すと、もみじイチゴはオレンジ色に熟し、桑の実も白色から赤色、そして黒色へと甘く熟し始め、懐かしい味を楽しんだ一日だった。

センター周辺では、アジサイが色づき、雨の日には大きなカタツムリが徘徊し、春にうるさく鳴いていた雉も子供が出来たようで、龍さんによると、メスが四、五羽の雛を連れて走り回っているらしい。

さて、肝心の文献センターの作業の方はといえば、何だか気乗りがしないのと、出かけてばかりいるので遅々として進まず、報告にもなりません。ちなみに、Ｂ―１グランプリの結果は「富士宮やきそば」の二連覇でした。

（山田崇正）

【作業メモ】

二〇〇七年五月二日（夜）～五日

蔵書目録の入力データと現物との照合とナンバー付けの作業。三日・四日で一六〇〇件余りを片付け、当初予定をクリア。初めは作業手順に慣れないために目標達成は心許なかったものの、徐々にスピードもアップされ、四日は余裕であった。

四日夜は、丹澤農村青年社の小笹さんを迎え、持参の放牧豚で夕食会が大いに盛り上がる。

五日は午前中、片付け。昼から浅間神社のお祭り見物に出かける。参加は現地・山田、東京から佐藤・伊藤・松本・古屋・加名義・奥沢。

六月二四日

岩佐・綿引旧蔵資料の整理（戸田三三冬宅）。富士宮から山田、東京から古屋・加名義・飛矢崎・奥沢。布留川信さんの聞き書き（一九七〇年代のテープ）を整理しまとめていく計画を立案。

六月三〇日～七月二日

蔵書入力データ追加の一〇〇〇件ほどの現物照合とナンバリング作業。七月一日で終了。二日は片付けの後、龍・山田・奥沢で、丹澤農青社の富士あさぎり農場を見学。都合よ

５月作業の合間にセンターの前で

運営委員会議事録（抄）

四月運営委員会　四月二一日

○会計報告について
　会計担当より一般会計とカレンダーの特別会計（途中経過）報告。
○センター通信発行について
　四月一八日付で「文献センター通信２号」を発行した。
○スイスＣＩＲＡカンパ要請について
　特別に支援カンパを募集するのではなく、キネマフェスタでの収益の一部を渡すことをメインにする方向。
○キネマフェスタ
　会場の関係から人数制限する方向とする。イベントの詳細についてはメーリングリストをつくって、そこで進行させる。また、この機会に物販を行う。ポストカードの販売やカレンダーの告知、またＴシャツも販売する。
○交流会（九月／富士宮）
　当初七月に予定していた富士宮での交流会については、キネマフェスタとかぶるので無理そうだが、関西方面の人たちとの交流の場はやはり設けたいので、九月以降に改めてセッティングする。
○連続講座
　キネマフェスタが終わってから（秋？）、狭い意味での「アナキズム」ではなく広くアナ傾向のものをテーマにした講座をしていきたい。テーマは例えば、サッカー、パンク、ネオダダ（日本）など。担当希望者に任せることとした。
○データベース
　三月工房に書籍データベースと年表データベース用のサーバを置く。　※すでに、設置済み。
○戦後アナキズム年表部会
　一九八七年以降に発行されたアナ系雑誌から項目を拾っていくのはどうか。まずは雑誌の洗い出しから始める。なお、項目は出典を必ず明記することとする。

五月運営委員会　五月一九日

○富士宮合宿（五月ゴールデンウイーク）についての報告
　和文の単行本に関しては、入力したデータに基づいて、現物を確認したうえで、ナンバリングを実施した。これにて、データベース内のデータと現物が一対一に完全に対応する。
　一六五九冊のデータの照合とナンバリングが完了。
　※データ入力済で照合作業で残ったものは、七月中に完了した。
○富士宮交流会について
　一昨年より毎年七月に富士宮で集会を行っていたが、今年はシネマイベントがあることから九月に変更する。日程は九月一五日～一七日あたりとする。名古屋などの日程と調整する。
○サーバ
　データベース構築の効率化のため、各自宅ＰＣからデータベースにアクセスできるようにするための実験が成功。サーバソフト（ＶＰＮ）（約二万円、ＳＯＨＯ版、同時接続三人まで）の導入を決定。

第三回富士宮集会
九月一五日（土）～一七日（月・祝日）を予定。
　キネマ・フェスタ『アナーキー』開催準備のため、七月恒例の富士宮集会を九月に行います。名古屋・静岡の墓前祭と一部重なりますが、ぜひ顔を出してください。

　今後、目録はもちろん、戦後アナ運動データベース（年表）でも活用する。
○来年版カレンダーについて
　担当を決めた。印刷所に見積もり、予算二〇万円くらいになる模様（紙の残余部分でポストカードを制作）。基本フォーマットについては、今年のものを使用する。
　流通は、去年より拡大させて、なるべく多くのところで扱ってもらうように努力する。
　デモ写真の顔出しについてはルール作りを進める。
　材料集めを行う。センター所蔵の素材も（写真や現物もの）。
○グッズ制作

Ｔシャツを制作して、シネマイベントで販売する。図柄はスペイン革命とＣＩＲＡオリジナルデザイン。

また、Ｗｅｂ上でバーチャルＴシャツ制作販売をしてもよいのではないかとの意見も。例えば、アナキズム関係の図柄を多数用意して、一〇人を超えるオーダーがきたら製作をする、など。

六月運営委員会

六月一六日

○作業日の変更について

これまで、月に二回集まって行っていた作業（コンピュータ関係、撮影、資料整理など）を毎月一回、第一水曜日に変更する（開催は必要に応じて）。

運営委員会は従来通り、第三土曜日。

○Ｔシャツ制作について

キネマフェスタの開催に合わせてＴシャツを制作、販売する。「スペイン」と「ＣＩＲＡオリジナル」のデザインで、制作することとし、イレギュラーに、発注する。（制作費として、既に支払済み）

※スペイン（黒地にグレーの図版）

※ＣＩＲＡオリジナル（黒地に白の図版）（エスペラントで「国家もなく、主人もなく、しかし人はいる」の文字を挿入）

○ キネマフェスタについて

イベントの通しで使える解説（チラシ）を制作する。

当日ブースに、文献センターの入会案内・募集チラシを置く。

二〇〇八年版カレンダーの告知も同時に行う。

○二〇〇八年版カレンダー（および年表）について

キネマフェスタが終わり次第、制作を開始する。ただしそれまでに各自、図版候補を考えておく。（アメリカブックフェア、ドイツ反Ｇ８の写真、センター所蔵図版、書庫写真などなど）

ほんコミニケートにサンプル（二〇〇七年版）を送り、二〇〇八年版の取扱いを依頼する。

○多部数パンフ等の取扱いについて（山田さんより提案）

文献センター書庫に、同一のものが一〇冊以上あるパンフ等は、一〇冊は残し、それ以外は売却等の取扱いとする。

「私はアナーキスト」とオシムは語った

サッカーに特別な関心はない。ところが、日本代表チームの監督に就任したためであろう、その発言が紙上でよく取り上げられるようになって目にする機会が多くなったオシム監督の記事、その発言に目を向けると、これがなかなかに面白い。同氏を取り上げた連載企画をこの半年ほどの間に二回も掲載した日経新聞には、きっと肩入れをする記者がいるのだろうと推測される。私が興味を覚えたのも、それらの記事のおかげである。面白く感じて切り抜いた発言の二、三を拾い出してみると、こんな具合である。

「千葉の監督（〇三年）になって驚いたことの一つが、負けチームにサポーターがブーイングではなく“次はがんばれ”と励ますことだった。どうもこの国には結果だけにとらわれない文化がある、ということに気づいた」

「日本に来てサッカー観が変わった。……日本に感化され、同化したという意味ではない。それでは皆さんもつまらないし、私が監督をするメリットもない。ともに働きながら、日本人の面白さに感じ入った、ということです」

「日本は経済も生活の質もいろんな面で世界のトップクラスだが、本当は資源に乏しい島国で一一億を超す人が暮らすこと自体が大変なリスクのはず。なのに、それをリスクと感じていないように見えるのはなぜ？」

一つには鋭い観察があり、それが独自の視点と着想を生んでいる。それを可能としているのは、自らの目で見、頭で考える知的手法の持ち主であり、背後に多くの思考の蓄積を備えているからであろう。外交辞令にとどまらない、異質なものに対して率直な関心を持ち、異質なものへの敬意がある。その敬意は事柄の正負を見分けつつ、プラスの側面に注目してそこに積極的に関わっていこうとする姿勢に読み取れる。

そんなちょっとした知識を得ていた時に、友人が付箋をつけた一冊の本を貸してくれた（『オシムが語る』〇六年、集英社）。その付箋箇所の見出しが「私はアナーキスト」であった。彼はインタビューに答えて曰く。

「私が心掛けているのは、自分でも納得できる生活を実践しようということだ。民主主義はプロパガンダから生まれるものではない。生活で実践するものだ。私は多文化の暮らしを実践したい。信念を持って、心からそう思う」

――それでは、監督の考え方、生き方を一言で言うと？

「私が実践しているのはアナーキズムだよ」

オシムの目は笑っている。

「アナーキズムというのも、ひとつの党派だよ。それどころか、最高のイデオロギーかもしれない。もっとも実践はむずかしいがね……」

「自分でも納得できる生活を実践すること、そこにアナキズムを冠する以上、発言は単なる意表をつく思いつきや戯れ言ではない。

（奥沢）

アナキズム文献センター　会員を募集！

二〇〇六年三月の京都集会、七月の第二回富士宮集会を経て、〇五年来取り組んできたＮＰＯ法人設立を一時期棚上げにし、文献センターの活動の実質化を図るべく、当面は会員制のもとで活動・体制づくりを進めてきました。

文献センター会員への参加を広く呼びかけています。

皆様の積極的なる参加をお願いします。会費は年間一口一〇〇〇円としていますが、可能であれば複数口でお願いします。

【寄贈書】

■久保田一氏より

・藤枝文学舎ニュース59・60号、久保田さんは同誌に「小野庵保蔵私論」を連載中。

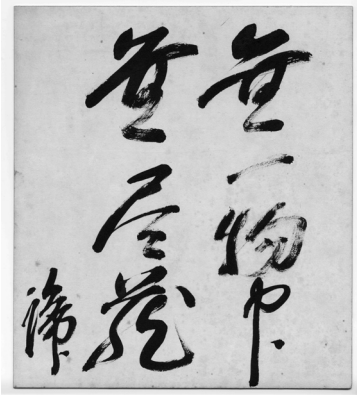
■川口秀彦氏より

・社会運動通信（日刊、タブロイド版、８頁、日本社会運動通信社）５１１号（１９３１年６月27日）～５３８号（同７月29日）の中の15号分（欠落・破損あり）

■白仁成昭氏より

・高木顕明述『日蓮宗非仏教』（法蔵館、明治27年、国会図書館蔵のコピー）

「無一物中無盡藏」



右の色紙は、唐沢隆三氏から寄贈を受けた、植村諦さんの筆によるものです。一九五七年一〇月の日付が裏面に記されています。

【解説】

無一物中無盡藏
有花有月有樓臺

といふ対句の前半です。誰に尋ねても、この句は蘇東坡の作と答へる筈ですが、さて、どこに書かれてあるのか、東坡全集も持ってゐるのですが、さつぱり判りません。（白仁）

アナキズム文献センター通信　第３号
発　行／二〇〇七年七月一八日
発行所／アナキズム文献センター
編　集／運営委員会
連絡先／東京都新宿区新宿１の30の12　三月工房気付
郵便振替口座　００８５０―３―３００１０
口座名　Ａ文献センター
Ｅメール／info@cira-japana.net
定価／一部一〇〇円